

Die Eiche

ディ アイヘ
<http://www.jdg-chiba.com>



Japanisch-Deutsche Gesellschaft
der Präfektur Chiba
〒274-0822 船橋市飯山満町 2-518-1
清和会第2ワールドナースィングホーム内
電話 047-461-9111 Fax 047-461-7010

年頭のご挨拶

-千葉県日独協会会長 金谷誠一郎-

新年おめでとうございます。平素は千葉県日独協会の活動に対して、格別のご協力をいただきまして、誠に有難うございます。本年が会員の皆様、関係者の皆様にとって有意義な年になりますよう祈念しております。



さて、去年は、世界中でこれまでにない異常気象、災害が多発、又、我が国では、夏の酷暑、西日本豪雨、北海道及び大阪での地震などにより大きな被害を受け、未だに復旧が遅れている地域もある状態で、一刻も早い復旧が望まれる状況です。又、去年は第一次大戦が終了して100年目ということで、欧州では各地で記念式典が開催されました。

当協会でも、習志野の俘虜収容所で1918年に世界中で5億人が罹災し死者5000万人が亡くなったと言われるスペイン風邪で亡くなられたドイツ兵に対する慰霊祭が11月18日（日）に習志野霊園にある慰霊碑前で、ハンス・カール・フォン・ヴェアテルン大使、マティアス・ライボルト駐在武官、県庁、船橋市・習志野市、陸上自衛隊第一空挺団の関係者をお迎えして、習志野第九合唱団有志、千葉女子高のオーケストラ部の皆様のご協力で無事に開催することが出来ました。

大使閣下には大変喜んでいただき、式典後に自ら指揮棒を振って、女子高の皆さんとドイツ国歌を合唱されておられました。大使は式辞の中で「今年は世界各地で第一次大戦終結100年の記念行事が行われていますが、これは悲惨な戦争を二度と繰り返してはならないという警告の意味です。」と述べられました。

しかし、世界の現状を見ると、嘗ては世界の警察官と言われていた米国がトランプ大統領誕生後は、「米国第一」を主張し、米国の知財を利用して覇権を握ろうとする中国との間で貿易戦争を行い、不穏な空気に包まれています。評論家の中には、「ツキジデスの罠」という言葉を使って、やがては米中戦争迄発展すると危惧する意見も出て来ている状況です。このような世界情勢の下ではありますが、私達には粛々と活動が続けて行くことが求められておりますので、会員の皆様には引き続きご協力の程、お願い申し上げます。

そこで本年の方針ですが、恒例の行事に加えて、先ず昨夏発足致しました「青壮年部」では、昨年秋にも実施しました「ドイツパンと料理を楽しむ会」を本年も第4回として続けて行く他に、3月3日（日）にドイツ語圏の民俗工芸をベースにした「トールペイ



青壮年部委員会 18/07/01

ンティング教室」を午後3:15より船橋中央公民会で開催致します（詳細は、P.4参照）。その他にも皆様に負担の掛からないイベントを、近日中に勝見青壮年部部長を初めとする皆さんと検討する予定です。ご期待ください。

又、2011年の日独修好150周年を記念して大使館から寄贈していただいた30本の菩提樹の近況をチェックする「菩提樹委員会」、及びボトルシップ研究会では、第一次世界大戦中に習志野俘虜収容所に居られたドイツ兵、エーリッヒ・カール氏の日記を翻訳する『「エーリッヒ・カールの日記」を翻訳する会」を発足させました事をご報告し、本年も会員の皆様方の暖かいご支援、ご協力を心よりお願い申し上げます。

Dr. Jörg Torsten Nickel 氏からの手紙

■ 習志野における慰霊祭に寄せて-18/11/7

こんにちは、宗宮先生

このところ仕事が大変忙しく、お返事遅くなったことをまず最初にお詫びしなければなりません。若干のコメントを申し上げます。

私の祖父は大変厳しい運命にさらされましたが、日本の収容所生活について一度もネガティブな言葉を語ったことはありませんでした。



祖父は私の第一の祖母[注：彼の最初の妻]には1914年の戦争勃発以後一度も会うことはありませんでした。彼女は1915-16年の中国からドイツへの本国送還の途中ニューヨークで亡くなり、同地に葬られました。祖父の娘、つまり、私の叔母は戦争勃発後の1915年に上海で生まれました。祖父はこの娘を1919年[注：終戦後]になって初めてその腕に抱くことができました。祖父はこの戦争によって妻と、そして、12年以上妻とともに幸せに過ごした第二の故郷チンタオ（青島）を失ったのです。

しかし、戦後良い展開もありました。祖父は最初の妻の妹であり、私の実の祖母である女性と結婚し、1921年には私の母が誕生しました。家では私のおばと私の母の間にはなんの違和感もありませんでした。二人は母親が違ってもつねに実の姉妹の関係でした。

祖父の孫たちのなかで過去にアジアに行ったことがあるのは唯一私だけです。私の自宅にはいまでも日本製のコーヒーセットがあります。1918年製で富士山と鶴が描かれた薄い磁器でできています。これを見るといつも私は祖父が日本にいた時代を思い起こします。私は電化化学（デンカ・ケミカルズ）にいて千葉に化学工場を建てた日本滞在の時代をよく思い出します。アジアは私の第二の故郷です。

敬具

ヨルク・トルステン・ニッケル

-2015年5月3日訪日。祖父は、Wilhelm Albin Otto Krebs。

ドイツ・オーストリア国境地域における 受難劇上演と観光 -新春講演会-

本協会恒例の新春講演会が1月19日午後、船橋市中央公民館で、標記演題により山田徹雄氏を講師に迎えて行われました。当日は会員ら50名が講演に聴き入り、質疑応答も活発に行われました。

ドイツ・オーストリアの国境地域であるアルプス地方には、古くから住民によって上演されるキリスト受難劇の伝統があり、それは近年、観光資源のひとつとしても評価が高まっています。この地域をめぐるそうした話題を、豊富なエピソード、データ、さまざまな資料にもとづいてわかりやすく解説したユニークな興味深い講演会でした。以下は、紙幅の関係もありすべてに言及できませんが、筆者の若干の感想も盛り込んだ当日の講演要旨となります。

尚、講師の山田氏は、1947年生まれ。早稲田大学大学院商学研究科博士課程修了。博士（商学）ドイツ政府給費DAAD留学生としてエアランゲン・ニュルンベルグ大学に留学。跡見学園女子大学教授を経て、2010年～18年跡見学園女子大学学長。現在、跡見学園常務理事・評議員。著書に『ドイツ資本主義と観光』（日本経済評論社、2015年）等多数あります。

ドイツ・バイエルン州のアルプスの山々に囲まれた人口約5,000人の小さな村オーバーアマーガウは、10年に一度、村人総出で世界最大規模の「キリスト受難劇」を5ヶ月間にわたり演じていることで夙に有名です。しかし受難劇が上演されているのは、ドイツ側のオーバーアマーガウだけではなく、オーストリア側の、ティロル州クーフシュタイン郡のエアル（人口：約1,500人）、ティアーゼー（人口：約3,000人）でも行われています。

観光の観点から言えば、オーバーアマーガウのあるドイツ・バイエルン州ガルミッシュ・パルテンキルヘン郡の郡庁所在地、マルクト・ガルミッシュ・パルテンキルヘン（人口約3万人）は、1936年の冬季オリンピックの開催地として知られています。ウィンタースポーツの拠点として発展し、ドイツ最高峰ツークシュピッツェへの足場である保養地としても多くの人々が訪れています。尚、この冬季オリンピックでは、大阪出身のわずか11歳の少女、稲田悦子がフィギュアスケートで活躍、10位になったということは今ではほとんど忘れられています。オーバーアマーガウと言えば、家の壁を彩る「フレスコ壁画」の村としても知られており、木彫り製作も盛んです。この地は、かつてヴェネツィアとアウクスブルクを結ぶ、ローマ街道の要地として繁栄しました。

一方、オーストリア・ティロル州クーフシュタイン郡の郡庁所在地、クーフシュタイン市（人口約2万人）は、カール・ガンツァーの世界的なヒット曲「クーフシュタイナー・リート」で一躍有名となりました。見所としては、クーフシュタイン城塞があります。19世紀ドイツの有名な経済学者フリードリヒ・リストは、この地で非業のピストル自殺を図りましたが、その記念碑もあります。

こうした観光知識をもって、来年（2020年）開催される10年に一度のオーバーアマーガウの受難劇をぜひ観覧したいという思いを抱いた講演でありました。

同時に、オーバーアマーガウの受難劇があまりにも有名で集客力



が傑出しているため、他地域の影が薄く感じられました。しかしオーバーアマーガウに劣らぬ伝統をもつエアルや、ティアーゼーに見られる素朴な演劇にも、もっと注目が集められて良いのではないのでしょうか。

講演で話題になった中でとくに印象に残っているのは、児童文学で有名なエーリッヒ・ケストナーの作品『小さな国境往来』（日本語訳は『一杯のコーヒーから』）に出てくるエピソードです。この作品で、主人公はドイツ側に宿泊してバスを使って、日帰りでザルツブルクの音楽祭に通っています。ナチス時代、ドイツ市民は、オーストリアに出国する場合には、ドイツ帝国に1,000マルクの出国税を支払わなければなりませんでした。宿泊を伴わない「小さな国境往来」にはそれが課されなかったからです。

講師からは、2020年のオーバーアマーガウ受難劇の概要も紹介されました。開催時期は、2020年5月16日～10月4日の火曜日、木曜日、金曜日、土曜日、日曜日です。すでにネット上での前売り予約は開始されており、講師としては、近くの落ち着いた観光地ムールナウに宿泊して、鉄道の利用をお奨めすることでした。（常任理事・編集委員：木戸 裕）

懇親会

講演会終了後、船橋スクエア21 2階「今日和」にて懇親会（参加者37名）が行われました。須古副会長の絶妙な司会で会場は、非常に和やかな雰囲気になりました。



ハイデルベルグ大学キャンパスレポート

-青壮年部 竹内 優さんレポート-

-2/2千葉県日独協会Facebookへの投稿記事より抜粋-

新年明けましておめでとうございます。ドイツのハイデルベルグ大学に留学中の竹内です。皆様はどのように新年を迎えられたのでしょうか。私はハイデルベルグにあるAlte Brücke(正式名称カール・テオドル橋)の上で新年を迎えました。ものすごい数の花火と騒音で、2度目ではありますが、ドイツで迎える新年は日本の静かなお正月とはかなり違うという印象を受けました。



エスリンゲンの街並み

12月は勉強面では非常に忙しい一ヶ月でした。各自ドイツ語と英語でスピーチを作成し、それを他の学生が日本語に通訳するという課題があり非常に良い勉強になりました。（次頁へ続く）

12月中旬、エスリンゲンのクリスマスマーケットに足びました。エスリンゲン(Esslingen)はシュトゥットガルトの近くに位置しており、中世の面影が残っている可愛らしい街です。この街では毎年、普通のクリスマスマーケットの他に中世のクリスマスマーケットも開かれています。食べ物やグリューワイン、雑貨を売っているスタンドではお店の人たちが中世の時代の服装を身にまっています。



中世のクリスマスマーケット会場-全景

Heiligabend(クリスマスイブ)の日には、ドイツ人の友人の家に泊りました。到着後、最初にクリスマスツリーの飾り付けをしました。その後友人の家族とともに教会に行き、一緒に歌ったりしました。夜はろうそくを灯し、飾り付けしたツリーのもとで夕食を楽しみました。一泊という短い滞在でしたが、ドイツでのクリスマスの過ごし方を垣間見ることができた良い経験になりました。



厳かな雰囲気での夕食

約150年前の独墺を取巻く情勢

-日墺修好通商条約締結150周年-

今年は、我が国がオーストリアと修好通商条約を締結してから、150周年の記念の年となります。ナポレオン以前の欧州体制に戻すべく、1814年にウィーン会議が開催された当時から、オーストリアと国交を結ぶ、1869年までの期間どのような社会情勢だったのでしょうか。

ウィーン議定書で成立したオーストリアを盟主とするドイツ連邦が成立しました。35の君主国、4自由都市が加盟、しかし、実態としては、緩やかな君主制の連合体でした。

この間の社会動静としては、ナポレオンの欧州制覇によって引き起こされたナショナリズムを生み、同時に市民階級による自由主義が顕著になる時代でした。保守派、メッテルニヒは、言論統制、大学監視など弾圧を強めました。1848年には、ドイツ内各国、オーストリアで民衆による自由主義を求める革命運動に発展します。結果、フランクフルト国民議会開催、ドイツ連邦の機能は、停止します。

1848年以降、ドイツ統一の議論の高まりますが、オーストリアを含む大ドイツ主義かオーストリアを除く小ドイツ主義かの対立が起きました。ドイツ人を主体とする統一国家という点では、当初、大ドイツ主義という考えで一定のコンセンサスを得ていたものの、オーストリアにとっては、多民族国家のナショナリズム(ハンガリー、チェコなど)動きもあり、ハプスブルグ帝国の崩壊を意味することから反対。この間、プロイセンを中心として1834年にドイツ領邦内18か国が加盟する関税同盟を発足、経済的な統一性を強め、1866年、普墺戦争によってオーストリアの敗退により、1867年、オーストリアを除く、北ドイツ連邦が成立。ここに小ドイツでの統一が確定的となりました。美しき碧きドナウの名曲が初演されたのは、1867年。オーストリアは、ナショナリズムの強いハンガリーの独立を認め、オーストリア＝ハンガリー二重帝国が発足。このような情勢下で日本と国交を結んだこととなります。(理事・編集委員 勝見 浩明)

旧東ベルリンでの学校生活



ドイツと私 -本橋 緑

ちょうど小学6年にあがった1982年4月から1985年12月まで父(橋口昭八)の仕事で旧東独の東ベルリンに滞在しました。

東ベルリンには外国人のための語学学校があり、そこでドイツ語の基礎を学んでから、1983年2月に自宅から徒歩10分のヴィリー・ヒルシャー総合技術上級学校の6学年に転入しました。ここは東独の一般的な10年制の義務教育学校でしたが、規模が小さく、1学年から10学年まで1クラスずつしかありませんでした。全校生徒は200人程、外国人は私一人だけでした。



第一印象は自由！日本の中学校の様に細かい校則や定期試験がなく、友人はピアス、パーマ、化粧をしておしゃれを楽しんでおり、全体的にのんびりとした雰囲気が漂っていました。ただ共産主義教育は徹底して行われており、授業では4学年からロシア語が必修であり、7学年から思想教育を行う公民がありました。私はロシア語と公民の授業は免除されていましたが、ほかの授業、例えば国語や歴史などでも、資本主義を非難し、共産主義・社会主義を称える話は随所に出てきました。



当時のノートとファイル

一方、友人は西側の情報がテレビやラジオで入ってくることも、「drüben」(向こう側という意味、東独の人は西独の事をこう呼んでいた)が学校で教わるような「悪い国」だとは誰も思いません。自由で物資が豊富にある事も知っていました。ただその後の進路に影響するので、学校の授業では「Kapitalismus」を否定するような発言をしていましたが、それは本心ではありませんでした。



物理の授業風景

私はいつでも「drüben」に行けましたが、友人は壁を越えられませんでした。東独ならではの不自然な状況は沢山ありましたが、時間とともに友人と仲良くなっていきました。一般家庭には電話が普及していなかったため、毎回学校の帰りに口頭で遊ぶ約束をしました。よく80年代のユーロビート(西独のラジオ番組からカセットテープに録音したもの)を聞きながらおしゃべりをしていました。クラスで行った修学旅行もとても楽しい思い出です。



修学旅行の様子

帰国して数年後、大学でドイツ語を専攻していた時にベルリンの壁が壊れ、翌年東西が統一されました。嬉しいと同時に、自分のいた国が消滅してしまった事に衝撃を受け、とても複雑な気分でした。来年は早くもドイツ統一30周年になります。統一後すぐに友人と再会することができました。今でも定期的に同窓会があるらしく、私もいつかまた参加したいと思っています。

書籍/Buch

2002年よりベルリン在住の著者が、ストレスを貯めない充実した生活を送ることに対して、労働、休暇、住居、食事、衣服の視点からドイツ社会、ドイツ人との生活通じてストレスを溜めないヒントを与えてくれます。事実に基づくドイツ事情を知ることができます。限られた時間で効率良く仕事を行い、豊かな自然環境、休暇を完全消化し、家族、友人との団らん、100年前の住居を自分で手入れを入れて自分の生活空間を創るなどドイツならではの環境を通じた人間らしさの実現とともに自己の価値観の確立が必要と示唆を得ます。久保田 由希著 産業編集センター刊- ¥1,512- アマゾン (理事・編集委員: 勝見 浩明)



活動報告

■ドイツ語講習会 (参加者の感想)

ドイツ語の辞書も開かない日々が数年以上続いていましたが、ある日ふとドイツ語を又思い出してみようと千葉県日独協会のドイツ語講座に参加を申し込んだのが今年の秋でした。

教材はReiner Kunzeの童話 Der Drachen Jakob です。彼の作品は初めてでしたので興味が湧きました。内容、量とも講習会にちょうど良かったと思います。ドイツ語を読んでなんとなく想像できても、正確かつ日本語らしい日本語に訳するのは難しかったけれど楽しかったです。

この講座のおかげでもっとドイツ語に触れたいくなり、ドイツ語を楽しんで読んだり書いたり聴いたりすることが日々増えていった変化を自分でも驚いています。

童話の中のこの言葉が胸に響きました。

weil alle Kunst, auch die des Brieffestempeln, viel Zeit braucht.

語学も同じことが言えるのではないのでしょうか、こつこつと時間をかけて続けることが大切なのだと改めて思いました。最後に岡村先生、講習会担当の二見様、参加者の皆様、お世話になり本当にどうもありがとうございました。(講習会参加者 島崎富志子様)



講師岡村先生 (前列中央)、島崎様 (後列右から2番目)

■クリスマス会・忘年会

12月8日、新橋にあるミュージックレストラン「アルテリーベ東京」でクリスマス・忘年会が開催されました。参加者は、総勢43名でした。豊富な品数でおいしいバ



イキング料理を堪能しながら、ピアニスト 福 康子さんのかなでドイツ音楽に合わせて参加者が歌い非常に場が盛り上がりました。11月のドイツ軍人慰霊祭の折、ドイツ大使より頂いたワインも会場に登場。

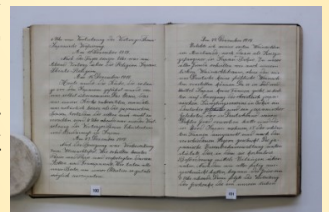
崇高な味わいを分かち合いました。誕生祝い、ジャンケン大会など須古副会長のイベント企画が繰り出され、ゲムートリッヒな雰囲気にも包まれました。尚、当日、この会に参加された佐藤さん



写真右端: 佐藤氏

■ボトルシップ研究会-「エーリッヒカウルの日記を翻訳する会」発足

習志野俘虜収容所にいたドイツ兵士「カウルさん」が手帳につづった日記を習志野市教育委員会が所有、当協会に翻訳要請がありました。日記としては、A4用紙120枚ほどの分量となります。



宗宮名誉会長が中心となり、ボトルシップ研究会のテーマとして有志を募り、カウル氏の日記の翻訳をメンバーで進めることになりました。現在メンバーは総勢8名ですが、引き続き参加者を募集します。

申し込み先: 宗宮好和名誉会長 fq8y-sumy@asahi-net.or.jp

今後の予定

3月3日

トールペインティング教室/青壮年部主催

講師: 西川珠子先生、助手1名

時間: 15:15-17:30

場所: 船橋市中央公民館 4F 第1集会室

まだ若干空きがあるの
で参加希望の方は早
めの申し込みをお願い
します。申し込み先:
青壮年部 本橋 緑
midom@f8.dion.
ne.jp

会員情報

新人会員

佐藤守彦 横浜市

法人会員

医療法人 同和会 千葉病院、社会福祉法人 清和会、
(株) 京葉ビル管理、(株) 和幸電気工事、
メルセデス・ベンツ日本 (株) 習志野事業所

編集後記

1963年に締結されたエリゼ条約(仏独協力条約)を補完強化する条約として1/22にドイツ西部の街Aachenで新独仏協力統合条約が締結されました。独仏の関係で捉えるならば、1870-1871における普仏戦争から二つの大戦まで宿敵関係にありつつも、今やEUの盟邦として友好関係を築いています。学ぶところは、多いかと思えます。ドイツ、オーストリアと日本の関係も約150年前に通商友好条約が締結されましたが、19世紀前半から現代に至るドイツ、オーストリアを中心に欧州の政治、社会状況がどう変化し、現代に至っているのか引き続き展開したいと思いました。ハプスブルク帝国における他民族国家と現代のEU事情など過去から学ぶ事柄もあるかと思っています。勝見 浩明